

ミクロネシアでのホームステイと幼児初等教育における算数の授業

上田 裕之

(18-1, ミクロネシア, 幼稚園教諭, 芦屋市立西山幼稚園)

よろしくお願いします。幼児教育の現職参加ということであまり事例がなくって参考になるかわかりませんがよろしくお願いします。今日も長いのを作ってきたのでとばしとばしやっていきます。よろしくお願いします。

ミクロネシアはここから南の方に赤道の少し上の方にある国なんですけれども、大きな4つの島がありまして東から西に点在してる島が独立するにも一つでは独立できないと。だから言語と文化が全部違うところがとりあえず独立するために集まった島なので、「国」としては不思議な状態です。スペイン・ドイツ・日本統治時代、アメリカ統治時代を経て現在に至っておりますけれども、アメリカの援助によって支えられている国なので、アフリカとかの開発途上国とはかなり違った状況にあると思います。

本当に4つの島がメインなんですけれども、文化も言語も民族、習慣もすべて違うような人達の集合ですので自分たちがミクロネシア人という意識は全然なくて、僕はポンペイという島にいたんですけれども、その人は「ポンペイ人」と思っていますので、本当に全然違う国で、言葉が通じ合わないのでも英語を主にしゃべってるというだけのことで、ミクロネシアという国とは理解していないですね。ミクロネシアの“地域”と同じだと思ってますね。近隣の国もミクロネシアと思ってませんので。私はポンペイに派遣されましたけれども別のところに派遣された人達とは全然会うことがないですし、習慣もインフラも全部違うという状況でしたので、これから派遣される方も、行く「国」という単位で考えるのではなくて、行く「地域」によって全然異なることがありますのでそういうことをご理解いただけたらなと思います。

今ざっと説明しましたが、南の島は比較的全て治安とか病気とか良いですので、特にポンペイに関しては親日的で日本人に対しても反日的な感情はほとんどありませんし、隊員としてはすごく過ごしやすかったなと思います。(スクリーンの写真を指して)日本の血縁者とか兄弟とか残っています。これは無名戦死の碑ということでこれは日本の方向をむいているということです。ほんというたくさんの方が犠牲になられて今の日本があるということ、外国にきて改めて考えさせられました。日本が統治してる時は、軍隊ばかりいるように思うかもしれないんですけど、ほとんどの方は住民の方、“日本人”の方です。だから集会所があって漁船があって昔の日本そのものです。向こうの人はその時代が一番良かったと。日本人は働き方を教えてくれてどうすればお金が儲かったり幸せになるのかを教えてくれたけども、アメリカ人は物をあたえてくれるだけで、何も僕たちに大切なものを伝えてくれない、ということを話してくれました。後で話をさせていただきますけ

れども、私はホームステイをさせていただきました。（写真を指して）右の人がホームステイ先のおじいさんで 86 歳、87 歳ですね。このおじいさんはお正月になったら一歳、歳取ったっていうんですよ、昔の戦前の考え方で。もうそのまま喋られて普通にこういうふうに、この間も 12 月 15 日に携帯で非通知とったら、「もしもし、上田さん元気か」と電話がかかってきておじいさんから携帯電話にかかってきたんですけども、それほど本当に普通に日本語を喋られます。ただ、日本から言うとな「内地」と、60 年前の言葉ですけども、本当に普通にこんな風に日本語を喋って。

（写真を指して）こちらが昔の兵隊の方です。日本から訪ねて来られました、ミクロネシアに。慰霊とかをしに。その方が、色々昔のことを振り返って、このおじいさんは軍隊で働いてたんですよ。現地人として、監視台でね。だからこの人は「アメリカ軍が攻めてくる」っていうんですよ。あくまで日本側で物事を考えらっしゃるから、「日本は太平洋戦争で真珠湾攻撃の後にアメリカ本土まで攻めてったら勝てたのに」と今でも言っておられるような方で、それぐらい日本人としてそういう風に生きてこられました。その方が訪ねてこられて、訪ねてこられた日本の方がおっしゃったのが、協力隊というのはすごく、ひどい、日本の国でありましたよね。軍隊で現地の人にひどい目にあわしたりとか。そういうとこに対して謝罪ですぐ協力隊が行ってる場面とか、NGO で色んなことしてることもあるけども、そうばかりじゃなくてすごく日本人のことを助けてくれた人もたくさんいると、ミクロネシアの人は本当に、自分たちのことを助けてくれたと、最後のほう戦争に負けそうになって、ごはんがなくなったときに、現地の方がものをくれたりとか、すごくお世話になった人たちに、こんな風に協力隊の人たちが参加して感謝の気持ちを表すことも、大事な国際協力じゃないか、という風におっしゃったことがすごく心に残っています。先ほど説明の中で、サカオと同じような文化があります。で、あとはカマテップとかを殺して食べて、というのが向こうの中心文化ですね。

僕の活動について紹介します。（写真を指して）ここがホームステイ先のおうちで、こういう普通の民家の感じです。今右に写ってたのが雨水ですね。雨水を二年間ずっと飲んでましたけども、お腹も壊さずに元気に過ごせましたので、意外と大丈夫でしたね。こんな伝統的なおうちが必ずどの家にもあって。よくツバルが今言われてますがけど、首都部もツバル状態で、結構満月の日のときになると、川が増水して家の横までこんな風に水が流れてくる状態ですので。だからツバルばかりが騒がれてますがけど、南の島全体が環境問題でやっぱりかなり困ってるけど現地の人たちはそんなことに気づいてない、っていうような状態ですね。こんな風にローカルの、昨日まで飼ってたものを殺して食べたりとか。あと私の家は本当に、今こういう南の島はどんどんファーストフードが盛んになってるんですけども、やっぱり私の島は、家は、おじいさんがすごくしっかりされてるので、ローカルフードをしっかり作ってくださって。川にバーっと鳥の羽が流れてたら「今日はチキンかな」みたいな感じで生活をさせてもらってました。ホームステイは、私は村単位でしたので、やっぱり学校が全部村で包まれてたので、ただ担任は一人暮らししていいんですよ、

都市で。多くの方がみなさんそうされるんですけども、隊員としてやっぱり学校の先生として働く中では同じ村の出身者として過ごしていかないと認められない部分がありますし、一人で暮らすことができますけども、ローカルの人との意味とか心にあるものとか、そういう文化を学ぶ上でもやっぱりローカルの人と暮らすことが大事な、と思って二年間ホームステイをさせてもらいました。

それで今言ったように、携帯がかかってくるように、今でも関係は続いていますし、この夏も実はまたもう一度ミクロネシアに行って来る位、今でも交流は続いています。もちろん強制したりと色々問題点はあるでしょうけども、おじいさんが日本の教育をそのまま受け付けられているので、きちっと伝えたことがきちっと人の心に残ってそれが受け継がれていて教育というものはやっぱり何物にも変えがたいものだし、形としては残らないけどもずっと財産として受け継ぐものなので、やっぱり協力隊の中で教育的な活動を現地で色なくくりでされることは非常に大事なことだなと、いう風に思いました。

最初に行ったのが、(写真を指して) 仕事がこれです。これは実は、ある図書館、幼稚園なんですけども、小学校と併設なんですね。小学校の図書館を、前のピースコー、アメリカのボランティアが全部ナンバリングしてきれいに本を並べたんですね。この状態じゃないです。でも校長が全部捨てる、こんな本いらん、ということになって、ピースコーもピースコーとして決して悪いとは言いませんけども、やっぱり形だけ綺麗にととのえるのではなく、向こうの人達が望んでいることをしなければいけないと最初の日に思いました。何が必要か、何が大事なのかというのをやはりこちらでしっかり受け止めてから活動していくことが大事かなということを改めて思いました。私の場合も、実は小学校に行ったら小学校の校長先生が幼稚園もついているから小学校に隊員が前から派遣されてたんですね。幼稚園も隊員が来たらやっぱりいいから呼んだらいいんじゃない、ということで気軽に呼んでもらったので、着いて校長先生が挨拶して、宜しくお願いしますって言ったら次の日に校長先生が代わってしまって、「お前のことなんか知らん」って言われまして。同僚も君の事なんか知らないし、小学校のシステムと幼稚園は違うんですよラインが。小学校の教育委員会と幼稚園の教育委員会は上は一緒なんですけど途中から違うんで、全然誰も僕のことを知らない状態が何ヶ月か続きまして、三ヶ月ぐらい経ったときには僕がなんで来ているかっていう説明会が教育委員会で開いて、こんなふうな経歴があって、こんなことが私はできますよってというようなことができるような状態でした。

3万5千人の島ですけど、24の幼稚園があってやっぱりアメリカの援助の関係で給食とかもあって、朝と昼、給食。9時、8時から12時までの2回の給食があって、すごく恵まれてる状態ですね。日本と違ってカリキュラムがあって、健康・保健・体育・算数・国語・理科・社会って感じですごくカリキュラムの量で、それをこなすのはとてもできないような状態で、なんかすごい色んなものが入ってきていてそれを現地の人達が消化できない、というような状態。私の場合それをどういうふうにと子どもにとって良い方向を見出していくか、というのがミクロネシアの最初の幼児教育の成り行きでしたからね。そういうとこ

ろから始めたらいいのかなというふうに思いました。

本当に、私ももう一遍気持ちを切り替えて勉強を教えることにしました。(写真を指して) ここが海に面しているこのアワックの小学校ですね。この一室に幼稚園がありまして、こんなふうにきれいに保育室もありますし。これ僕が作ったやつも入りますけども。この最初に字だけ書いてくるということにして、でも字だけじゃなくて子どもわからないからこうして、茶色の車はケワリーンちゃんのやつだよとか、こういうふうにしたらわかるよ、みたいなところからスタートして色んなデコレートをまず作りました。なんでかという、彼女だったらデコレートが大好きなんですけど、貼ってあるのは英語の、アメリカからもらったポスターとかで、全然子どもたちが読めないものばかりだったので、それを必要なものに変えて、現地の人が喜ぶもの、すごく興味をもってくれることをまず第一に活動していくことにしました。

本当に一時間、朝来てから、歯ブラシですごいガシガシってするんですけども。そういう色んな文化が入ってきていてという状態ですね。あとはほとんどがお勉強ですね。(写真を指して) こんなふうに先生が真ん中に座って、こうして学校のルールを説明するんですね。ごみを捨てたらごみをごみ箱に捨てなあかんとか、言うことは聞かなあかんとか。その勉強を先生と個別で分かれてしたりとか、給食をすごく豪華に。朝、昼とすごく豪華な給食でした。歯ブラシもみんな一斉にね、みんなに歯ブラシ与えてするっていう状態で。子どもたちがね、先生が鞭を持っているので、それで言うこと聞くんですけど、僕は鞭を持っていないので、言うことを聞かないんですよ。そしたら、ある子どもがあるとき、僕に鞭を持ってきて、これを持って、これを持ったらみんな友達は言うことを聞いてくれるからって言ったんですけど、ありがとうって言いながらその場に置きましたけれども。もうそのような状態ですね。僕も言葉があまりそんなに現地語が上手でなかったんですが、逆にそれを利用しようと。あまり流暢にしゃべるとカウンターパートがいなくなるので、カウンターパートでいてもらうには、ある程度しゃべれるようにだけになっておいてあんまり流暢にしゃべったら多分いなくなるので、「通訳の方は常にいてね」ということで、現地語を上手くしゃべれないことを利用しながら活動しました。

南の島は一年間同じ気候なので、クリスマスが盛んでしたり、オリンピックみたいなことをしたり。普段子どもたちは、普通の服をきているんですが、(写真を指して) こういうときはこういう格好をして。(魚の写真を指して) 「どこで買ってきたの」 てきいたら、「スーパーで買ってきた」 って言ってましたね。そんなふうにアンバランスな状態ですね。

字を教えているんですが「字だけかいて、スクーターを描きなさい」といきなり授業が始まるんですよ。それでは分からないのでとりあえずスクーターの絵をかいて教えたり、ほんとに単純なことですけど絵を描いてこうして並べてみて子どもが分かりやすいように教えてみたり。またさっきのルールのことですけど、ルールだけ暗唱しただけでは分からないから、絵を描くと何を言っているかよくわかるから具体的にしていこう、ということからスタートしていきました。先生たちは、遊びは学びではない、教えることが学びだと

思っていますので、ここを変えていくことはなかなか難しい。あと先生たち自身が、興味や関心を育てるのではないと思っているので、そこは難しいところですね。カリキュラムにのっとり教えることが大事と思っているので、その部分はしっかり、どこの国に行かれても、現状というものは理解して。私たちにとっては一年間・二年間の感想ですけど、彼女たちにとっては一生の生活の場ですし、モチベーションが違うのは当たり前ですし。彼女たちは分かりやすい教育を受けたことが無いので。僕たちは日本で分かりやすい教育を受けていますので、そんなふうにしたらいいいというのが分かりますけど。イメージの中に経験の無い人にそれを伝えるのは難しいことですけど、日本のことを思わずに、むしろにあった教育をしていくのも大事だと思いました。

またターゲットを絞って、「算数」、特に「数量感覚」。幼稚園の子が1、2、3が言えませんし、小学生は3が何かが分からない。例えば1 mや10 k mなどの数量感覚が身についてない。1から10までの数的感覚が身についていない。です。結局計算ができない。それが小学校につながってきますので分かりやすく楽しく数量感覚を身につけることを大事にしましょう、ということでこういうふうにカードを作って。6という数字だけ覚えるんじゃないかって、1、2、3、4、5、6というのが6なんだよ、ということで裏表でカードを作って遊んだり。最初は3マスから。123マス。それができたら5マス。1から5まで教える。5ができたら10マス。1から10まで教える。なぜかという、アメリカの教科書がここには入ってきているんですね。アメリカというのは1から12まで、ワンセット。13で始まって、1ダース。ここの現地語は日本と全く同じなんです。1から10まできちっと教えましょう、1から10までの構成を身につけましょうということで取り入れました。それでカードゲームで遊んだりしました。やっぱりカウンターパート、村の人はモチベーションが低かったんでこのままではなかなか難しいということで、太洋州の全体の教育会議がハワイで開かれるということで、本当は僕みたいな外のは入れてくれないんですが、無理やり入れてくれ！ということで。その代わりパワーポイントを一日で2時間くらい作ってこいということで。カウンターパートに「一緒にハワイに行って勉強しよう」ということで、カウンターパートにプレゼンを通して伝えたいことをいってもらえばいいかな、と思って彼女にそういう経験をしてもらいました。

村だけでは難しいので、違う幼稚園に行って、公開授業をしようということで、僕のやっている授業を90分9コマ。子どもたちを集めて、3人集まって3人で座ろうとか。僕が3人といったら3人集まるというふうになりました。そのときにプレゼンで説明していったんですね。これは、そのときの資料です。数量感覚養ってくださいということです。結局必ず実践とビジョンを一緒にしていく。どっちかじゃなくって。実際に僕たちが示して、それをどういう意味があるのかを伝えるのが大事だとおもいました。英語が苦手ですので、この時もカウンターパートに手伝ってもらいながらしました。何個かのアクティビティ覚えたら、1週間であんまり考えずに楽にできるよと伝えながらしていきました。

300キロ離れているところにいてプレゼンをしましたし、小学校の教員とも協力してワー

クッションをしました。向こうの先生は授業を見たことが無いので、いい授業をみてもらおうと、日本の会員が実際にドリルをしたり。また大事なことは僕たちだけじゃなくて、必ず現地の人を巻き込んで一緒にする。(写真の人物を指して) 彼は鳴門教育大学に 2 ヶ月いったんですけれども、日本のこと少し分かっているので、メインの人をひっぱって来て、彼と一緒に、そして彼がそのうちできるようにしていこうということで。

参観授業のやり方も、教科書は学校にあって家に持ち帰ることはできないので、ノートを教科書がわりにしましょう、ということを教えたりですとか。グラフで X 軸と Y 軸を教室の床にたとえてやってみましょう、とか。向こうの人はすぐに「教材がないから」、「お金がないからできない」というので、お金を一切かけずに授業をしましょうという試みを隊員と協力しながらしました。大事なことは、日本人がいつまでもやるのではなくて、ローカルの人にやってもらう。ローカルの先生に授業の仕方などをいろいろつたえながら教えました。

やっぱりアメリカのスパイラル方式は、1 年生のときに足し算・引き算・割り算全部するんですよ。2 年生になるとちょっと難しいのを繰り返すので、それもいい考えなんだけれども、ちょっとまた難しさがあるということで一個一個丁寧に教えていこうということで。100 年かかりといわれたのですが、諦めずに地道に自分のやっていることを信じて、相手のためになることをやっているんだと考えてやっていくことが大切だなと思いました。あとは学校単位でできなくても家族と鳴門教育大学を結んでやったりだとか、あと小学校単位とカウンターパート集めて、広域研修をやらせてもらったり。形に残さずといわれたんですが、こうして最後に形に残してしまったんですが、問題集みたいのを作らせてもらって学校に配布させてもらったりしました。

あと町で歌ってたら教育委員会の人に「CD 出さないか？」といわれて日本語のクリスマスの歌作って CD 配ったりとか。本当にいろんなことをさせてもらいました。協力隊というのは日本と違って自由な時間がありますし、活動の幅も、好き勝手はできませんが相手の国のためになることで、自分が大丈夫だと思ったことはどんどん積極的にアプローチすることがすごく大事なことでないかなと思いました。

あと、やはり現地のことを好きになるということが一番大事だと思います。もちろん日本とは違うのでいろいろやなこともあると思いますが、相手の国のよさがいっぱいあると思いますし、ローカルのことを好きじゃない人は、やはり正直活動もあまり上手く言っていないというところがあると思います。スキルではなくていかに自分が相手を受け入れられるかということも大事だと思います。

あとインターネットライブ等をしたり、情報誌とかできるだけ機会があったらできるだけ自分から情報発信してせつかく税金をつかわせていただいていたので、ちょっとでも機会があれば逃さずに自分の方からアプローチしていくことが大事かなと思ったりしました。幼稚園の場合は興奮するのが難しいですね、幼児教育の中で、幼稚園の子どもたちにビデオを見せましたが、45 分間見事に聞いてくれました。家帰ってからすごい話して

くださって、そういうこともできますし、また現地語を使ってゲームして遊んだりしました。校外に向けては夏休み、芦屋市の先生を 30 人から 40 人を集めて講座みたいなのを開いて 2 時間話をさせてもらいました。JICA の出前講座ですね、土曜日にもできますので、土曜日は私立の学校にいかせてもらったり説明会に参加させてもらったりもしました。兵庫県には JICA の教員 OB 会がありますのでそこで報告させていただいたりしています。できるだけ貴重な経験をさせていただいた JICA の方初め文部科学省の方とくに現場の方ですね。

現職さんは一番自分が「今は行きたくない」ってくらい日本で頑張ってる時にいくのがいいと思うんです。何でいくの？って引き止められるなかで行かれたほうがいいと思いましたし、僕はその時期を選びました。だから僕の後には普通なら講師が来るんですけど、特別に正規の人が代わりに来るくらい待遇もよくしてもらいましたし帰ってきてからもいろいろサポートしてくださってます。だから僕は 3 月 25 日に帰ってきたんですけども 26 日には働きました。2 年間いろんな経験をさせてもらったので、やはりそれを恩返しすることが非常に大事だと思いました。その分やはり帰ってきてからも過酷です。正直言って。でもやはり 2 年間こんなに良い経験をさせてもらった恩返しですし、それを忘れず頑張って頂けたらなと思います。